

「ハイデルベルク・ストラスブール派遣参加報告書」

京都大学文学部 地理学専修 3年 田畑茉里香

ハイデルベルクの街、京都大学ハイデルベルクオフィス見学、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の学生との議論を中心に報告する。

ハイデルベルクに到着した翌日、ハイデルベルク城とカール・テオドル橋などを訪れた。ハイデルベルクは驚くほど落ち着いていて美しい街であった。広場には、ナチス政権下で行われた焚書の記念碑があり、過去の反省を胸に刻み続けるドイツ人の精神を感じ取ることが出来た。

ハイデルベルク大学京都オフィスを訪れた。京都大学は、欧州の高等教育機関や産業界と京都大学をつなぐ拠点をロンドンとハイデルベルクに置くことで、国際競争力ある研究の推進、国際力豊かな人材の育成、国際貢献の推進を目指している。ハイデルベルクオフィスは、以下のような使命を持っている。

1、 京都大学の欧州地域における研究活動の支援

欧州地域の学術動向等情報の収集および発信、国際共同プロジェクト運営支援など。

2、 京都大学の欧州地域における教育活動の支援

ヨーロッパ諸大学と京都大学の交流の推進や、日本留学希望者への情報提供や相談など。

3、 教職員・学生の国際化の推進および広報

教職員・学生の欧州地域におけるインターンシップ、能力開発プログラムの企画など。

4、 広報・社会連携・ネットワークの形成を推進

学術交流協定締結先等・欧州地域の政府関係機関との連携強化など。

ハイデルベルクオフィスは、日本で留学したい学生や、欧州で留学したい学生の支援をしているだけでなく、様々な役割を果たしていることが分かった。

次に、ハイデルベルク大学とストラスブール大学の学生と難民問題について議論したことから考えたことを報告する。

印象的だったのは、ドイツとフランスの難民に対する考え方の違いである。ハイデルベルク大学の学生の多くは、難民受け入れに積極的であり、ドイツはまだまだ難民を受け入れられると考えていた。一方ストラスブール大学の学生からは、フランスがイスラム教徒を一方向的に阻害しているのではなく、イスラム教徒側にも異文化を寄せ付けない意識があるという意見や、苦勞して納めた税の多くが難民のために使われることを不公平だという考える人が数多くいるという意見を聞いた。この意見の相違の背後には、ドイツは好景気だがフランスは深刻な不景気であることや、ドイツでは少子高齢化が進んでいるがフランスは若者が多く失業率が高いことなどの社会経済的相違、ドイツ人はヒトラー政権下に犯した人種差別の罪を今も反省しているという歴史的相違などの要因があるということだった。ハイデルベルクとストラスブールは距離的に見ればあまり離れていないが、それぞれの国の社会システムや歴史は大きく異なっており、それが難民への意識に影響しているようであった。

また、欧州の学生の、政治や社会情勢への関心の高さに刺激を受けた。両校の生徒は、難民受け入れに積極的であれ、消極的であれ、自分の意見とその理由を持っていた。日本の若者はどれだけ難民問題を理解しているだろうか。どうして日本は難民受け入れに消極的か、どうすれば受け入れられるか、考えている日本人はどれだけいるであろうか。

また、難民問題に限らず日本の政治や社会情勢に関しても、どれだけ日本人は関心を持っていて自分の意見を持っているであろうか。多くのことを考えさせられた研修であった。